日本ボリビア協会会報誌　令和５(2023)年　３月１５日発行

カントゥータ
Cantuta

No. 51

アンデスの東側に位置するボリビア南部、チュキサカ県 Camargo、Cinti 渓谷に広がる YOKICH ワイナリー

撮影者　小林正博氏

１．　ボリビアと日本を繋ぐ企業・団体情報　：

縁あってボリビアの市場へ事業展開　……小林　正博

２．　南米で子供たちに教育を受けさせて　その２　……細萱　恵子

—コロンビア・ボゴタの学校と教育—

３．　ボリビア開拓記外伝—コロニアオキナワ　疾病・災害・差別を生き抜いた人々—　その２　……渡邉　英樹

一般社団法人日本ボリビア協会

ASOCIACIÓN NIPPON-BOLIVIA

ボリビアと日本をつなぐ企業・団体情報

１．縁あってボリビアの市場へ事業展開

マックス建材株式会社 海外推進室長
一般社団法人日本ボリビア協会　監事
小林正博

Ⅰ　ボリビア日系人の母国への想いに共感した屋根材の販売

当社マックス建材株式会社は横浜市港北区で金属屋根を製造する会社であるが、ボリビアのコロニア・オキナワ生まれの知花賢伸と賢正の兄弟が経営する有限会社 K&K 板金工業との縁により、ボリビアへ金属屋根を販売する事業を展開している。賢伸はボリビア・サンタクルス市のガブリエル・レネモレノ自治大学獣医学部を、賢正はペルーのヴィジャレアル国立大学歯学部を卒業するも、折から南米を襲ったハイパーインフレの中で、日本への出稼ぎを決意し、賢伸が 1989 年２月に来日して板金の仕事を学び、追って賢正も来日して、二人の名前を取った K&K 板金工業を起こしていた。その当時から親交を結ぶことになったのが、ガルバリウム鋼板製※の金属屋根を製造するマックス建材の榎本浩康社長である。榎本は知花兄弟の母国への想いに共感し、重く割れ易いレンガ色の粘土瓦やすぐに錆びるトタン屋根が多いボリビアに、軽くて丈夫な金属屋根を普及することを決意した。※耐食性、耐熱性、加工性などに優れたアルミニュウムや亜鉛の合金メッキ鋼板。

マックス建材と K&K 板金工業は、JICA の中小企業海外展開支援プログラムを活用して、「基礎調査」としてボリビアの屋根市場を調査すると共に、「日系研修」として知花兄弟の甥とその友人を 10 カ月にわたって受け入れ、金属屋根の製造と施工について学ばせた。その研修の中で、知花の甥とマックス建材の社員でもある榎本の姪とが出会い、後に結婚して、一児をもうける。現在は、二人はボリビアと日本双方を拠点に、マックス建材の社員として金属屋根のボリビア展開にも関わってくれている。

ちなみに現在、我々のボリビア進出を支えてくれているオズワルド・ウヨア・レネモレノ自治大学元副学長は学生時代、知花兄弟の両親が経営していたサンタクルスの定食屋の常連客で、六法全書を抱えながら店に通い、その後、同大学の後輩となる賢伸と親交を結んで、現在も支援を惜しまない。

写真 1ー1　左から榎本浩康、ウヨア元副学長、知花賢伸、筆者（サンタクルスで）

当社は韓国や台湾には既に実績を有しているが、飽和したアジア市場よりも、遠く離れた地球の反対側、日本の金属屋根屋にとって未開発な、そして知花兄弟

の故郷でもあるボリビアへの展開は魅力的であると考えている。JICA から「案件化調査」としての支援も得て、具体的なボリビア展開を目指し、ルートを開拓しているところである。

◆ボリビアの建築における屋根市場調査

ボリビア最大の市場となるボリビア第二の都市サンタクルスの屋根事情を俯瞰すると、日本でスペイン瓦・洋瓦と呼ばれる伝統的なレンガ色のコロニアル瓦が多くを占めていることが分かる。コロニアル瓦は重く、焼成温度が低いと割れやすく雨漏りの原因ともなり、表面も劣化が進むと苔などが生しやすい。また、ラパスやコチャバンバでは、コロニアル瓦に加えて、日本でも昔使われたトタン屋根（亜鉛メッキ鋼板）やそれに 5%のアルミを加えたガルタイト（溶融亜鉛 5%アルミ合金めっき鋼板）が主流で、これらの素材に細かい波形をつけて強度を持たせているものが多い。

トタンに比べればガルタイトは錆び難いが、我々はさらに強度があって色落ちせず、超長期にわたって錆びることがないガルバリウム鋼板をボリビアに提供するため、市場調査を続きてきた。ガルバリウムは、アルミ 55%と亜鉛 43%による合金めっき鋼板で、弊社製品は「マックス瓦」の名で 30 年保証をつけて提供し、国内では 10 万棟を超える実績がある。マックス瓦はさらに、業界トップの 0.62mm の板厚で変形し難く高い耐久性がある上、含有量 80%以上のフッ素樹脂塗装を付すことで、極めて高い耐候性、耐食性等を生み出し、屋根の美しさを長期にわたって保つことが評価されている。

写真 1―2 サンタクルスに多いコロニアル瓦、

写真 1―3　首都ラパスの錆びたトタン屋根

この 5 年の間にボリビア市場でも中国製のガルバリウム屋根材が散見されるようになったが、マックス瓦の半分ほどの板厚で変形しやすい上、金属の特性として極めて硬いガルバリウムは曲げやプレスの成形過程でクラック（割れ目）を生じ易いことから、製造段階で曲げ部分がひび割れた製品も多い。また、取り扱いの粗雑さから市場に提供する過程で傷が着けられている製品も多く散見される。風雨にさらされる金属屋根は、塗膜が剥がれたクラックや傷から確実に錆が進むことから、日本の市場ではこのようなクラックや傷は絶対にあってはならないことである。弊社製品は、誰でも製品を安

全に毀損することなく扱える最適サイズ（全長 1970mm 全幅 473mm）としており、さらに関係者は製品を梱包、緩衝材を挟むなど、製品の扱いに細心の注意を払っている。

アジアでも中南米でも開発途上国の建築業界では、技術者、職人たちの職種が日本ほどに特化しておらず、ボリビアでも少し器用な職人がコロニアル瓦も葺けば、レンガ積みもやることがある。そのため、屋根の雨漏り修理を引き受けて、その部分は修繕できても、無造作に屋根を歩き回ることで、新たな雨漏りを誘発する話は枚挙にいとまがない。マックス瓦は、その強度から職人が歩き回っても全く問題ないが、その上で金属屋根の施工に関する必要最小限の技術指導は必要であり、ボリビア市場への参入の際には、技術移転を同時並行して展開していく必要がある。そのための、スペイン語の施工マニュアルの整備やスペイン語字幕の施工動画作成も進めているところである。

写真１－４　当社のフッ素加工したガルバリウム鋼板４色のマックス瓦

◆マックス瓦のビジネス展開

延べ５年に及ぶ市場調査で、潜在的な金属屋根の需要はラパスやコチャバンバがより大きいものと見込まれるものの、先ずはサンタクルスを拠点として弊社主力商品マックス瓦の PR と営業展開を図ることとした。その背景、理由としては、

①知花兄弟の地元で、地域を理解し人的ネットワークがあること

②ハイスペックで、価格的にも廉価ではないマックス瓦のターゲットを、最大の経済都市サンタクルスの一定以上の所得者層と定めたこと

③サンタクルスの人々はより開放的、先進的でかつ高級志向である、言い換えれば新しい物好きで、見栄っ張りだと考えられること　最後に、

④知花兄弟の人的ネットワークも奏功して、現地代理店となるパートナー候補が得られたことである。

当面、マックス瓦の PR と営業展開は現地代理店を通じて行い、速やかにマックス瓦を使った新規住宅建設や既存住宅のリフォーム・改修の実績を得たいと考えている。その１棟目がモデル・ハウスであり、サンタクルスの人々が実際に高品位・高機能の金属屋根を目にすることが重要であると考えている。「百聞は一見に如かず」の例え通り、モデルハウスによって伝統のコロニアル瓦とも中国製のガルタイトやガルバリウムとも違うハイスペックな金属屋根を見てもらうことが最大の PR となる。これらの実例を見ることで、ボリビアで多く聞かれる「金属屋根は暑くなる」「雨音がうるさい」「赤く錆びやすい」との不安を払拭できると確信するからだ。

そして、輸出入ベースの市場展開が更に進めば、工場進出もあながち夢ではなくなる。既に開発が進むサンタクルス郊外の「ラテンアメリカ工業団地」に土地も確保され、一部機材も搬入しているからだ。中長期の構想ではあるが、内陸国ボリビアでは競争力を得るために現地生産へと進むことが必須で、パートナー候補もそれを強く望んでいる。

2023年2月下旬、サンタクルスで、午前中は建材業界のビジネスグループ、午後は高等職業訓練校の最上級生達を対象とした技術セミナーを開催した。参加者はこれまでのイメージとは異なる金属屋根に衝撃を受けた様子で、サンタクルスへの早期の入荷を待望する声が口々に聞かれた。

また、技術者からはボリビアになかった金属屋根の切断や加工の技術に驚嘆の声も聞かれた。そして、セミナーでは最後に施工者の安全確保の重要性を動画で説明した。ボリビアでは、高所からの転落等の死亡事故が公になっているだけで年間2,000件以上発生しているからだ。「安全は全てに優先する」概念のこの国への定着も、我々の使命である。

このセミナーで修了証を贈呈した若き技術者たちが、いずれマックス瓦を活用してくれることは、我々の期待であり、楽しみである。いつか、これらの点と点がつながって、この国の安全で豊かな住生活環境に結びつくことを願いながら、サンタクルスでのビジネスを進めているところである。

写真1−5　2023年2月の金属屋根技術セミナー
金属屋根の加工・施工技術と安全対策を伝える

写真1−6　サンタクルスの高等職業訓練校生と共に
前列中央左が知花賢伸、右が榎本浩康、後ろが筆者

Ⅱ　「Viento Boliviano」ボリビアの風プロジェクト

単に日本からボリビアに輸出するだけでなく、ボリビアの製品も日本にご紹介し、販売したいと「ボリビアの風」プロジェクトを立ち上げ、ボリビアワインやシンガニの輸入を始めた。ボリビアのワイナリーやその歴史、背景や現状などをご紹介したい。

Viento Boliviano
THE WIND FROM BOLIVIA

図1−1　当社「ボリビアの風」プロジェクトロゴ

◆新大陸へワインを伝えたキリスト教

ワインが世界中に広まる背景には、キリストが最後の晩餐でパンをとって「これが私の体である」、ワインの杯をとって「これが私の血である」と言って弟子たちに与えたことがあるという。ワインはキリスト教の世界伝播とともに広まっていったものと思われ、多くの聖職者らによってキリスト教と共にぶどうの苗とワインづくりの技術が広がった。アメリカ大陸では、メキシコでぶどう栽培が始まり、それがチリやアルゼンチンなど南米大陸や北米カルフォルニアに伝わっている。ちなみにシャンパンの名品「ドン・ペリニヨン」もワインの瓶内発酵を発見したシャンパーニュ地方ベネディクト教会修道士の名前を冠したものであるのは興味深い。今を時めくカルフォルニアワインも、最初に手がけたのは修道士であり、日本で最初にワインを飲んだのは織田信長と言われているが、それはイエズス会のフランシスコ・ザビエルの献上品であった。赤ワインの tinto が変じて珍陀酒（ちんたしゅ）と呼ばれていたようだ。日本酒が神への豊穣の感謝や清めであることを思えば、ワインが神聖でキリスト教神事に欠かせないものであることは理解できよう。

◆ワインのニューワールド

「おいしいワインの事典」（成美堂出版）によれば、ワインの世界地図はヨーロッパとニューワールド（新大陸）に大別される。ヨーロッパ伝統の生産国は、フランス、イタリア、スペイン、ポルトガル、ドイツ、オーストリア、ハンガリー、ギリシャ、スイスなどである。それに対してニューワールドは、昔ヨーロッパの植民地だった国が多く、ぶどう栽培やワインづくりは入植者やキリスト教修道士によってもたらされていることは前述したとおりである。代表的なのはアメリカ大陸の米国、カナダ、チリ、アルゼンチン、大洋州のオーストラリア、ニュージーランド、そして南アフリカだ。これらの後発国は、広大な土地、年々進化する技術、低廉な人件費等を活かして安いだけでなく、高品質なワインを量産しているという。世界中に多々あるワイン・コンテストでは、ヨーロッパもニューワールドも区別なく、毎年激しくしのぎを削っていることからも、ワインの世界の進化と競争の激しさが理解できる。

ボリビア・ワインの生産は後述するように 200 年ほど前にチュキサカ県カマルゴ（Camargo）Cinti 渓谷で始まったという。

現在の南米における年間生産量を見ると、

アルゼンチン（1,499 千トン）
チリ（1,214 千トン）
ブラジル（274 千トン）
ペルー（73 千トン）
ウルグアイ（72.5 千トン）
ボリビア（10 千トン）
パラグアイ（1.5 千トン）

の順位でボリビアの生産量は多くはないが、それだけ希少なワインともいえよう。（ちなみに、日本の生産量は 85 千トン

である。）　弊社「ボリビアの風」は、あえてマイナーなボリビアワインの輸入と普及に挑んでいるところだ。

南米ワイン生産国の両雄となるチリとアルゼンチンは、アンデス山脈を挟んで異なる自然環境でぶどうを育み、ワインづくりを行なっている。チリは地中海性気候に似て、収穫前後に雨が少なく、良質なぶどうを育てることができる。また、フンボルト海流からの冷たい風により気温が上がることなく、酸味を感じるシャープな味わいに仕上がるという。また、オーナーの出身国によりフランス的、スペイン的、イタリア的と異なる特徴のワインが生まれることも興味深いところだ。対するアルゼンチンには、アンデス越えの乾いた風が届き、降雨量も少なく、乾燥した気候となることから、長い日照時間と相まって果肉が厚く、タンニンや栄養分が豊富なぶどうが育つという。また、昼夜の寒暖差も 20 度と大きいことから、ぶどうに引き締まった酸味が生まれるという。

ボリビアワインの産地である南部タリハ（Tarija）やサンタクルス州中部のサマイパタ（Samaipata）も、アンデス山脈の東側に位置し、アルゼンチンに近い環境と見ることができる。標高 1500m から 2500m の荒々しい大自然の中で育まれるぶどうは、適度なストレスを受けて豊かな果実を生み、優れたワインへと形を変えていく。そのようなボリビアワインを日本のワイン好きに是非知ってもらい、味わってもらいたい。

◆中南米の蒸留酒

南米にはチリやアルゼンチンなど世界に誇れるワインがあり、また、ドイツ系移民などが継承してきたビール造りがある。ボリビアのビール・パセーニャ（Paceña）も世界ビールコンテストで優勝したことで、案外、世界にその名を知られている。これまでワインなど醸造酒を語ったところで、目を蒸留酒に転じてみよう。

南米の代表的蒸留酒と言えば、竜舌蘭から作るメキシコの酒テキーラ（Tequila）。1949 年の全米カクテルコンテストでテキーラベースのマルガリータが優勝したことで、世界中に知られるようになったという。そして、中米を中心に広く飲まれているのが、サトウキビを原料としたスペイン語名のロン（ron）、ラム酒である。ロンは、蒸留製法や熟生の方法もいろいろあり、色も香りづけも多種多様なので、価格の幅も大きく、良いものは数万円する。同じサトウキビ原料となるブラジルのカシャーサは、一部の古酒を除いて無色透明で比較的早出しの蒸留酒となるので、価格の幅は小さく、カイピリーニャ（caipirinha）など果汁と合わせて飲むことが多い。

一方でボリビアには、アレキサンドリア・マスカットを原料とするシンガニがあり、ペルーにもマスカット他のぶどうを原料とする蒸留酒ピスコ（pisco）がある。現在は自動車燃料としても使われるサトウキビに比べると、随分と高価で贅沢な原料ではないだろうか。

シンガニはボリビアの大衆的な酒場で一般的に飲まれる酒であり、主に「Chufly」と呼ばれるシンガニ、炭酸、ライムのカクテルが飲まれている。ちょうど日本の「チューハイ」とよく似た味であるが、ベースがマスカットを原料とする蒸留酒なのでチューハイよりくせがなく美味しい。個人的には、「シンガニは学生がコーラで割って飲む酒」と以前から聞いていた先入観もあり、安価な酒のイメージであったが、じっくり味わえばなかなか奥の深い蒸留酒である。そのままでも十分美味しく、イタリアの grappa と比べても引けを取らない。が、カクテルにすれば可能性はさらに大きく広がる。我々は、ボリビアワインとともに、このマスカット原料の蒸留酒シンガニを少しでも日本の方々に知ってもらおうと取り組み始めた。

◆YOKICHI ワイナリーとの出会い

当社が 2017 年から K&K 板金工業とともにボリビアへの金属屋根普及に取り組む過程でサンタクルスから車で 2 時間ほどの高原地帯サマイパタにある平均標高 1750m のぶどう畑から生み出されるボリビアワイン「1750」と出会い、2019 年から輸入を開始した。日本の工業製品をボリビアに売るだけでなく、ボリビア製品を日本に広めることも企業としての役割であり、親日的な国ボリビアとの持続的な関係を構築することが大切であるとの思いからだ。

写真 1―7 サマイパタ産のボリビアワイン「1750」

醸造元 UVAIRENDA が生み出す「1750」は、海外にも輸出され、ボリビアのスーパーにも陳列される言わばメジャーなワインで、赤４種、白２種とロゼのラインアップを揃える。「1750」ワインをボリビアの民芸品とともに日本国内でネット販売していたが、空輸であったために大量のストックはなく、追加の輸入も折からのコロナ禍により順調にはいかなかった。さらに昨年、醸造元から独占販売権の提案もあったが、最低輸入量の縛りも大きかったので、「1750」ワインの継続的な輸入から舵を切ることとした。

そして出会ったのが YOKICH ワイナリーである。日本人の名前「与吉」を想起させるそのワインは、フルーティーな白と飲み易い赤が印象的だったが、何よりもともに生産されるシンガニ「Tierra Alta」は改めてボリビアを代表する蒸留酒の力と可能性を感じさせるものであった。当然ストレートでは強い酒だが、口の中に広がるアレキサンドリア・マスカットの風味、口から鼻に抜ける爽やかさ、喉ごしの透明感など、シャープでフルーティーなこのボリビアの蒸留酒をぜひ日本で広く知ってもらいたいと感じた瞬間であった。

写真 1―8　新たに輸入する YOKICH のシンガニとワイン　金色の原産地証明が付く

◆YOKICH のワインとシンガニ

新たなパートナーとなる創業 1870 年のワイナリーYOKICH は、ボリビア最大のワイン生産地でアルゼンチンとの国境に近い南部の街タリハから北へ車で 3 時間ほどのカマルゴ（Camargo）にあり、タリハ県ではなく北側のチュキサカ県(Chuquisaca)に属する。改めてわかったのは、ボリビアのワイン生産は 200 年ほど前にこのカマルゴ Cinti 渓谷で始まったことだ。そのあとに人口の多いタリハでもワインが作られるようになり、タリハがボリビア最大のワイン出荷量を誇るようになる。それ故に、タリハのワイナリーの歴史は 100 年ほどである。カマルゴ Cinti 渓谷のワイナリーは多くはないが、伝統への誇りと厳格な生産管理を徹底しており、ワイン職人やソムリエが参加する「渓谷規制委員会」（VALLE CONSEJO REGULADOR）が組織されている。毎年生産されるワインとシンガニの中で、厳しい基準を満たしたものだけに「Cinti 渓谷原産地証明」（金の丸ラベル）をつけ、そこにはボリビアワイン発祥の地の表示も併記されている。

2023 年 2 月に Cinti 渓谷の YOKICH ワイナリーを訪れた。標高 2500m にもなる高原は、夏とはいえ冷涼で乾いた空気に包まれ、過ごし易い。YOKICH の契約農家である Sonia Marquez さんのぶどう畑を案内された。ぶどうの栽培には、「ぶどう棚方式」と「生け垣方式」があるが、ボリビアではフランス同様に手間はかかるものの、ぶどうがしっかり根を張り、土壌からの養分が吸い上げられやすい生け垣方式が採用されている。さらに、ここでは大きな木にぶどうのツタを絡ませる伝統の栽培法も併用されている。100 年生きるというぶどうの樹を親から子へと大切につなぎ、より自然に近い形で育んでいく。今注目される森との共生を大切にする農業、アグロ・フォレストリーを先取りした様な栽培法だ。

YOKICH の直営ぶどう畑は大自然の荒々しさそのままの Cinti 渓谷に広がる 7 ヘクタール。アレキサンドリア・マッスカットから作られる白ワイン「MOSCATEL」、ヨーロッパから来て Cinti 渓谷にしかない赤ワインの「MISIONERA」、やはり Cinti 渓谷だけで作られる赤ワイン「VISCHOQUEÑA」と、日本のワイン愛好家もあまり聞きなれない個性的なラインナップが目を引く。

3 月半ばには、20 人ほどの村人の手を借りて、4 日ほどで収穫を行い、8 ヶ月

かけて発酵、熟成させる。我々「ボリビアの風」は、伝統を守り、信頼されるものを作ろうとする YOKICH の姿勢を評価し、マイナーなボリビアワインの中でも、さらに個性的な YOKICH のワインを広めようと共に歩み始めた。

アレキサンドリア・マスカットから生まれる蒸留酒シンガニは、YOKICH から「Tierra Alta」の名で生み出され、蒸留の回数で味も値段も変わってくる。黒ラベルは 2 回の蒸留で 2~3 年の熟成、金ラベルは 3 回の蒸留で 5 年かけて熟成させる。手間もかかるが、蒸留のたびに味に深みが生まれ量が少なくなるので、当然価格も上がり高級品になっていく。これらは「学生がコーラで割って飲む酒シンガニ」とは別物なのかも知れない。シンガニの製法は、スペインがこの地を領有した 450 年前に宗教的な要請により伝えられたという。まさに、キリスト教修道士たちによって宗教的儀式にご用立てられたのであろう。YOKICH ワイナリーの人々と接して、伝統を守って高品質なワインとシンガニを真摯に作ろうとする彼らのたゆまぬ姿勢に、そのような宗教的とも言える使命感を感じたのは私だけだろうか。

マックス建材でボリビア産品を紹介・輸入する「ボリビアの風」チームは、一歩ずつだがこれらワインやシンガニを学び、日本の市場にも目を配りながら、ボリビア・ワインとシンガニを広める準備を行っている。いつか、ボリビアからやってきたこれらの産品が街のバーや酒屋に並ぶことを夢見ながら

（終わり）

写真 1－9　契約農家 Sonia Marquez さんを囲む YOKICH の Fanny と Veronica Mendoza Moron 母娘

写真１－10　YOKICH ワイナリーのシンガニ蒸留装置

※マックス建材株式会社のホームページはこちらです。https://www.maxkenzai.co.jp
ボリビアワイン「１７５０」は下記より購入できます。「ボリビアの風」のワインとシンガニの取扱い状況については、当社のホームページ にて随時お知らせします。
https://www.maxkenzai.co.jp/boliviawine/

２．南米で子供に教育を受けさせて　その２
−コロンビア・ボゴタの学校と教育−

一般社団法人日本ボリビア協会
常務理事　細萱　恵子

◆コロンビアにおける学校教育制度と親たちの教育に対する熱意

会報誌「カントゥータ」31号で、南米のコロンビア・ボゴタで子供たちに教育を受けさせて、それぞれ帰国子女入試を受験させたり、大学へ行かせたりの親子の奮闘？を書きました。今回はその２として、コロンビア・ボゴタの教育制度、親たちの教育に対する熱意など感銘を受けたことについて書こうと思います。

国際協力機構（JICA）の森林プロジェクトの専門家としてコロンビア・ボゴタの国家企画庁（Departamento Nacional de Planeación）に赴任したのはもう15年ほど前のことになります。当時娘は高校２年生、息子は大学２年生でした。６月中旬に私が一人で赴任し、１か月後の７月20日ごろ、それぞれ試験を終えてコロンビアにやってきました。私がコロンビアに着いた日が３連休の祝日で街は閑散としていて、埃っぽく、建物は落書きだらけで、こんな裏寂れたところに子供たちを呼び寄せるのは無謀かな、日本の学校を続けさせる方が良いかなと少し不安になったのを覚えています。

ともあれ、子供たちはボゴタにやって来て、９月に新学期が始まりますから、学校探しは１カ月と少ししかありませんでした。娘の学校は何とか国家企画庁の秘書のアドバイスで見つけることができ、今までの日系人の真面目な働きぶりと日本人は優秀であるという当国での評判が娘の入学を助けてくれたことは「カントゥータ」31号で書きました。

子供たちの学校探しを通じて得られたコロンビアの学校についての第一印象は、学校教育に対する親の熱意です。私が経験したのは、主にEstado６[※1]の地域に住む中の上以上のクラスの子供たちが通う私立学校や親たちです。

学校側もそれだけの費用[※2]（授業料が月５万円ほどで、当時日本で通わせていた私立高校と同程度だったのを覚えています）を取りますが、熱心に教えているようです。その頃住んでいたアパートから歩いて１分のところに、コロンビアで１，２を争うと評判の私立有名男子校セルバンテス校（Colegio Cervantes）がありました。毎朝６時５０分の始業のベルでちょうど目を覚ますことができます。始業時間が７時というのはこちらでは当たり前のようです。学校へ通うのは親が送り迎えするか、スクールバスが一般的ですが、ただコロンビアのお国柄か、玄関までお迎えに来て玄関まで送ってくれますので大変安心です。しかし、１軒１軒回りますので、通学時間が１時間とか１時間半とか掛かりますので、娘は朝５時半には家を出ていました。

こちらで知り合った知人の息子さんはまだ５歳ですが、Kinder（幼稚園）の就学準備コースでは、朝６時半授業開始で３時半に帰宅でした。２歳からInfantil、３歳

でKinder、5歳で小学校に上がります。Kinderで早、居残り授業もあり落第もあります。指示を受けたら、親も一緒に夕方５時くらいから２時間３時間と補習に立ち会わないといけません。親も大変ですが、それよりも先生の熱意には驚かされます。親を立ち会わせるのは子供の教育は学校任せではなく、親に責任があるという考えから来ているとのことです。

Kinderから英語の授業もあり、宿題もかなり出ているようです。補習がなくても親は夕食後かなりの時間、宿題の面倒を見ないといけないようです。というのはコロンビアではバイリンガル教育を国家の教育基本方針としていますので、英語教育の熱心さは幼稚園からかなりのものです。一時娘がホームステイ（長期出張も多かったので）した家では、子供たちをColegio Alemanなどに通わせていましたが、スペイン語、英語の他にドイツ語やフランス語などのTrilingualを目指しているようです。Primaria（小学校）、Segundaria（中・高等学校）でも、英語で授業をするところも多いですので（インターナショナルスクールというのはなく普通の私立校で）、英語の会話や聞き取り能力は充分高いといえます。ただ使っているテキストを見れば、それほどレベルが高いとは思われず、日本の大学入試で出される英語の読解レベルはかなり高いといえるでしょう。

◆日本の教育と比較して

日本人で、日本の競争社会の中で子供を育てるのは可哀そうだといって、当地に来た人がいましたが、日本のゆとり教育（今はなくなりましたが）とは比較にならない密度の濃い教育環境です。日本の学校教育も親として見てきましたが、詰め込み教育反対とか、子供の自主性を重んじて、と言っているうちに、１０年後、２０年後には日本は第三諸国に追いつかれるどころか、適わなくなるのではと感じました。

しかし小学生の算数では小数点以下2位の計算は必要がない、ついには円周率は３でも良い、と言い始めてから、ゆとり教育では国家の科学技術の発展に、いや国家の未来に影が差すと気づかされて、ようやくゆとり教育も幕を閉じましたが子供たちはまさにゆとり教育の真っ只中で育ちました。

コロンビアの母親と話していて、「子供に自由に考えさせる」というのは、「何も考えさせないと同じことだ」と言い切ったのを良く覚えています。最初に徹底的に基礎を教え込めば、後は自分で考えることができるようになるのだ、というのがこちらで知り合った親の考え方でした。

江戸時代の寺子屋、明治時代から第二次世界大戦までの日本の初等教育はそのような考え方だったかもしれません。論語をとにかく音読して覚えさせる、というのは理屈ではなく、たたき込んでからそれが血となり肉となって自分の哲学として生きてくるのだという考え方だと思います。

正直なところ、発展途上国のひとつである南米コロンビアに来て、このような教育に対する熱気を感じるとは想像もしていませんでした。いや、発展途上国だからかもしれません。鎖国から明治維新を経て、日本の戦前までの学校教育もそんな熱気にあふれていたのかもしれません。

◆コロンビアの公教育

一方、公教育はどうかというと、コロンビアに限らず、南米では昼間から働いている学童期の子供がいて、「学校も行かせないで働かせている」と思ったら、公立校は二部制となっていて、午前中のクラスと午後のクラスがあるため、変な時間に働いているというか、家の仕事のお手伝いをしている子供たちを見ることになります。そんなですから公立校の場合は勉強させる絶対時間数が少ないことになります。

公立校の先生のレベルや教材などについては色々と問題があるだろうと感じました。教科書を見せてもらったことがありますが、国家の検定教科書というようなものではなくて、細かな文字でびっしり書かれた３年分かひょっとして６年間使えるのではないかというような市販されている分厚い参考書みたいな本がテキストでした。４５分授業で年間授業何回分、何年生にはここからここまでの内容を教える、というようなシラバスもテキストからははっきりと示されていませんし、システマティックなカリキュラムができていないようでした。

前半で述べたコロンビアの「熱気ある教育環境」とはまた違った社会の側面です。都市と地方、階層による経済状態の相違など、日本人には想像もつかない大きな格差があります。しかし、コロンビアでは教育に向ける意識はどの層にも高まっていて、家に来ていたお手伝いさん（Sirvienta）も孫の教育のために働いていると言っていました。公立校に行かせては絶対ダメだという信念で、孫を私立校に行かせるために母娘（いずれもシングルマザー）で頑張っていました。

国家の公教育がしっかりしているということが、いかに次の世代の社会的、経済的格差を解消し、社会全体の底上げに帰することができるかと感じます。明治時代の日本が一定のレベルの初等教育を全国津々浦々提供できたということ、地方に住む貧しい家庭の子供でも社会階層の階段を上っていける機会を提供していたことは素晴らしいことだと思います。

また、基本的にコロンビアの民度の高さを至る所で感じることができます。パナマやグアテマラなどに行くと、有名な会社の経営者や社会の中枢で働く人たちが「実はコロンビア人だ」ということを度々耳にしました。コロンビアで経験した教育に対する熱意はコロンビアの社会の発展にいずれ繋がって行くだろうと思いますが、当地で経験し、予想していたよりもその後の発展が遅いと感じるのは結局、社会全体の底上げにつながる公教育制度の遅れではないでしょうか。

◆南米で教育を受けさせた子供たち

娘はコロンビアの高校を卒業し、息子は大学の海外交流プログラムによってコロンビアの大学で所得した単位も認められ、それぞれ就職しました。埃っぽい街を歩きながら、本当に子供たちを帯同して良かったのだろうか、と自問した日々を思い出すこともあります。しかし、案ずるより産むが易し、で何とか乗り越えてくれました。

先日コロンビアの家にもお寿司パーティに良く来た娘の友人が、コロナ禍が収束して早速日本にやって来て会う機会があったようです。ひとりは医師になりましたが、コロンビアの医学部は、通常過程を卒業してから専門医になるための過程があります。終了後は、地方の病院や村の医療施設で２、３年働くことが義務付けられています。この義務は専門医コースの前に入れることも後に入れることもそれぞれの判断で決めます。娘のホームスティ先の家庭の息子も医学部に通っていましたが、叔母さんに当たる女性がコロンビアでもトップクラスの指の整形専門医で、日本の技術レベルが一番であると、日本に研修に行った経験があることから、日本贔屓の一家でした。始めてそのお宅に挨拶に行ったとき、大学祭でサムライになると言って、見様見真似で羽織、袴を自分で縫っていました。

クラスメイトの彼はようやく３０歳を超えてボゴタの病院で働くようですが、最初から日本の勤務医と変わらない年収とのことでした。もう一人は学校で日本語を教えてあげたという友人で東京大学大学院に留学してきましたが、現在日本の政府系研究機関で研究生活を続けているようです。

息子の方は大学のジャーナリスト養成科に籍を置きましたが、学友は新聞やCANAL6など報道の世界で活躍しています。親しかった友人は「コロンビアのE-Gameを支える100人」として取り上げられ、コロンビアの期待される若手のひとりに選ばれたようです。クラスメイト達と今もＳＮＳで交流しているのを聞くと、子供たちの世界を拡げることができたと思います。　　（終わり）

※１　Estratoとはスペイン語で「階層」の意ですが、コロンビアでは住居地はEstrato１から６までに区分され、水道代、電気代など公共料金の負担が異なるようになっています。

※２　１カ月の授業料が５万円というのは当時のSirvientaの月給と同じでした。サイトによると公務員の平均月収が５万円（2019年）とのこと、30歳の医師の給料は20倍以上となり、格差を痛感します。

写真3－1　コロナが収束し、早速日本にやって来たコロンビアの高校の友人達と旧交を温める
クラスメイトにとっても日本がとても身近に思える存在になったのかも知れない

３．ボリビア開拓記外伝

—コロニアオキナワ　疫病・災害・差別を生き抜いた人々—

日本ボリビア協会相談役
渡邉　英樹

第一部　ボリビア沖縄県系人の歴史

迫害を恐れ、ルーツを隠す

こうした前近代的ではあるが、その勤勉さによって培った穏やかな奥アマゾンの日系社会であったが、日本の太平洋戦争への突入と敗戦によって、状況は急転直下、過酷な境遇へと突き落とされた。日本人は尊敬を得る立場から迫害を受ける立場へと変わってしまった。特に奥アマゾン地域ほど被害者が続出した。

当時の状況を『ボリビアに生きる』の中で、作家で詩人のペドロ・シモセ氏が「歴史をもたぬ人々の物語」と題した文章で説明している。ボリビアの日系移民の置かれた状況を的確に表しているので、長文引用となるが紹介したい。

「リベラルタの日本人社会は完全にボリビア社会に同化しており、その経済力だけでなく、ボリビア社会とりわけリベラルタの地域社会への貢献が認められて尊敬されていた。しかし突然、第２次世界大戦という嵐のような逆風が日本人の夢を吹き飛ばした」「日本は戦争に負けた。戦いに敗れると、権力の中枢から忘れられたボリビアのこの地方で、ドイツ人と日本人は自分たちが築き上げた経済と社会への貢献を無視した住民による報復を受け始めた。連合国側の勝利を盾にし、またアメリカ合衆国のやり方をまねて、地域のボスたちがドイツ人と日本人を追い詰め、財産を接収した」「彼らは農業協同組合を解散させ畑の作物をなぎ倒し、収穫物を燃やし、豚、馬、牛を殺した。すでにボリビアに帰化していた元日本人の農業者と商人は貧困のどん底に突き落とされた。このような暴行と残虐な行動は、警察がそれとなく同意し傍観する中で、ボリビア人たちによって行われたものである」「誰も私たちに説明してくれなかった。誰も私たちに謝りもしなかった。１９４５年以降、ドイツ人や日本人の子供であることは不名誉なことであり、屈辱と侮辱と恥辱に耐えねばならなかった」と記されている。

その結果、この人たちは日本人である

ことを隠し、自分の子供たちにさえ自らのルーツや日本のことを一切語らなくなった。日本語が分からず、自分のルーツも分からず、アイデンティティーを失った深い孤独を生きる日系人が誕生することになってしまったのだ。

私が会ったリベラルタ出身の3世の人のほとんどは日本語が話せず「おじいさんが日本人であったらしい」という程度の知識しか持ち合わせていなかった。そのうちの一人はサンタクルス市商工会議所の事務長としてやって来た青年だ。このポストに就くのだから、迫害の中で歯を食いしばって懸命に頑張ってきたはずだ。それなのに私を日本の政府機関の職員と認めても、私が質問するまでは日系であるとは言わなかった。そして、その後も同胞同士といった親しみのそぶりは一切見せなかった。自分のルーツをひた隠しにし、押し殺して生きてきたつらい過去があったことが想像された。

多くの人が難を逃れて奥アマゾンからサンタクルスへと移り住んだが、財産接収や焼き打ちなどの被害はなかったものの、差別による迫害はここでも例外ではなかった。

そのころのサンタクルスの様子を、やはり『ボリビアに生きる』の中で、画家のティト・クラモト氏が次のように記している。

「学校に入ったとき、私は自分がサンタクルスの他の人たちとは違うという意識を持った。それまでは家庭という環境に守られていたし、世界で起きたこと、つまり日本と米国との戦争について考えたこともなかった。そして日本が戦争に負け、私たちは最悪の事態に襲われることになった。アメリカの新聞、雑誌、映画の宣伝が町に溢れ、日本人は肉体的にも精神的にも嘲笑された。私たちの祖先は、残虐者、知恵遅れ、狂信者、醜悪な人種、チビ……、要するに最下等民族だと罵られた。（中略）私と兄弟たちは、このような反日感情の中で小学校から高校まで過ごさなければならなかった。発音の悪いことについて意地の悪い辛辣な逸話が作られ、私たちの名前の発音を歪曲し、あざけりの歌が歌われた。そうやって私たちは回復不能なくらい大きな精神的ダメージを受けた」と子供のころの状況

を語っている。

それでも頑張って歯をくいしばって生きてきた人々だった。

着任早々の１９６９年９月にサンタクルス市の敬老会に臨席する機会があった。戦前にボリビアに移住してきた沖縄県人のご老人たちが幾人もおられて驚いた。皆さん、ペルーから雪のアンデスを越えて、アマゾン上流域のリベラルタ周辺に入り、天然ゴムの採集に従事し、他の仕事でもその勤勉さによって、それなりの成功を収めていたにもかかわらず先の太平洋戦争の敗戦によってひどい迫害を受け痛手を負ってサンタクルスに移ってきた人たちだ。

そのうちのお一人の新垣庸英さんには何度かお茶に招いていただき、当時の様子をうかがう機会があった。驚いたのは、その丁重極まるお招きであった。まず使いの人が来て「お茶に招待したいが、受けてくれるかどうか」とのお尋ねがあり、「喜んで」と答えると、次に都合の良い日の問い合わせの使いの人が現れ、その上で正式なお招きの使いがあった。

まさに「守礼の邦の人」だと思った。その穏やかな紳士的お人柄のどこに、海を渡ってペルーに移住し、さらにアンデスを越えてアマゾン上流域のジャングルに転住するという蛮勇的行いをする情熱が潜んでいたのだろうかといぶかるほどであった。

庸英さんのお宅は１階が店舗で２階が住まいとなっており、周囲の中でもひときわ目立つ立派な建物だった。カフェや旅行社を営んでいたが、ゴーカートの遊戯場やソーダ工場も経営したこともあると聞いた。温厚な人柄ながら時代を読んで、しっかりと事業をされてきた方でもあった。

お茶の時間の中で、私にとって忘れることのできない話を聞くことになった。

それは、お子さんに関してのことだった。庸英さんは祖国日本で教育を受けさせようと男の子４人を帰国させた。何とそのうち３人が召集され、その全員が戦死したと静かに話されたのだ。

「そんなことがあっていいのか」と体中に戦慄が走り言葉を失った。住民の４人に１人が亡くなったという沖縄戦の凄惨な悲劇だけにとどまらず、この戦争は地球の反対側に住む沖縄の移住者たちにも容赦のない苦しみを与え

ていたのだ。

沖縄村建設構想

こんな苦しみの中にいたにもかかわらず庸英さんたちは、自分たちよりもっとひどい状況にあると思われた本国沖縄の人たちを救おうと「沖縄戦災救援会」（具志寛長会長）を立ち上げ、寄付を募り焦土と化した本国沖縄に救援物資を送った。

その一方で、さらなる積極的救援活動として、本国の人々に夢を与えようと、ボリビアに「沖縄村」を建設すべく動き出したのである。それは夢物語ではなく、県人たちには過去にリベラルタでの成功体験があった。その実績に基づいた「沖縄村」構想の実現によって、第２次世界大戦のあおりでボロボロに吹き飛ばされてしまった自らの誇りと希望を取り戻したいという強い思いがあった。

新しく移住して来た同胞と力を合わせて繁栄を図ることによって、自分が子や孫に伝えることができなかった「日本のこと」や「日本人・沖縄県民であることの誇り」を与えられるのではないか、と夢を膨らませていた。

この構想がトントン拍子に進んだのは、サンタクルス県の未開の原野の開発を促進したいボリビア政府と、海外からの多くの引揚者を抱え混乱が続く沖縄の琉球政府側の思惑が一致したことが大きい。さらには占領政策の円滑化を図りたい米国の後押しもあり、入植地の選定まで、急速に事が運ばれた。

「沖縄村」建設構想を抱いた戦前の移住者は、調査、検討の結果、交通が不便で、かつ日本人への迫害がひどかったリベラルタから離れ、サンタクルス市の東方74キロ地点のブラジル鉄道が開通した近くの場所を新天地の入植地として、ボリビア政府から１万ヘクタールの用地の払い下げを受けた。そして母県沖縄から新移民を受け入れるための「うるま移住組合」を設立した。

実現への決め手となったのは、米国と琉球政府の委嘱を受けた米国スタンフォード大学教授ジェームズ・テグナー博士が、１９５２年５月[※2]「うるま耕地」を実地調査して「移住地として適地である」と報告したことである。同博士はそれと併せて援助・指導の必要性を力説した。この報告に基づき、米国政府は沖縄

の人々のボリビアへの移住を承認し、渡航費の補助とアメリカの第２次世界大戦後の発展途上国援助計画であるポイントフォアのボリビアにおける出先機関を通じて、入植初期の費用として１万７５００ドルを「うるま耕地」に振り向けることを決定した。

（つづく）

写真4―1　サンタクルス市の敬老会、左端が筆者夫妻、同列左から5人目　稲垣庸英氏、同列中央が西領事夫妻（1969年9月）

※１　清藤幸吉氏は熊本県出身で、その夫人はヘルマン・ブッシュ大統領の姉である。筆者はサンタクルスのお宅に何度もお邪魔していたが、そこで清藤氏の甥のナティシュ・ブッシュ大統領にも会っている。

※２　「うるま入植地」「うるま植民地」等々の呼称もあるが、コロニアオキナワの一般的会話では「うるま耕地」と言われていたので、本文ではそれに従った。

写真4―2　原始林の中に造られた伝統的キャンプ。ゴムの樹液採集でもこのようなものが用いられたと想像される。（1980年筆者撮影）

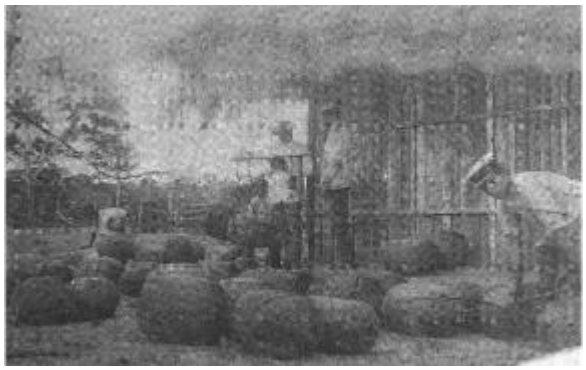

写真4―3　ゴムの樹液を固めたボラチャ。これが英国ポンド金貨に交換されたためゴールドラッシュとも言われた。

※本書は、日系２世の人たちが読みやすいように全漢字ルビをふっています。

＊＊

琉球新報社のご厚意で転載させていただきます。ご関心を持たれた方は、下記琉球新報社URLをご覧ください。
https://store.ryukyushimpo.jp

編集委員
椿　秀洋　杉浦　篤　細萱　恵子

◎日本ボリビア協会維持会員一覧◎

住友商事株式会社
特定非営利活動法人
日本ーボリビア医療友好協会
東京歯科大学市川総合病院
LATINO
西脇商事
株式会社アルジー
ARUJI
協和工業株式会社
KYOWA INDUSTRY Co.,Ltd.

Copyright© 2002-2022
一般社団法人日本ボリビア協会
ASOCIACIÓN NIPPON-BOLIVIA
All rights Reserved
（本誌の全ての掲載記事、写真、図表などの複製、転載、改変は禁止されています）